
魔法少女リリカルなのはStrikers 永遠の傭兵部隊

ダークカブト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 永遠の傭兵部隊

【Nコード】

N9173U

【作者名】

ダークカブト

【あらすじ】

広域次元犯罪組織NEVER、そんな汚名を付けられようが関係ない俺は唯、明日を求めるだけだ。

第1話 報告（前書き）

今回はエターナルの最初に合った報告みたいな話です。

第1話 報告

管理局の記録より傭兵組織 NEVER について報告する、NEVER 数々の管理世界において様々なテロ行為を行っており、その被害ははかりしれない、彼らの主な罪はテロ行為、殺人、器物破壊、管理局員に対しての公務執行妨害、そしてロストロギア、T2ガイアメモリの不法所持である。NEVERのメンバーは現状で6人

首謀者 大道克己だいでうかつみ

NEVERの副官 泉京水いづみみやうみづ

元受刑者 羽原レイカはねはらレイカ

NEVERの狙撃者 芦原賢あしはらけん

NEVERの特攻隊長 堂本剛三どうほんこうさん

そして黒い弾丸

ティアナ・ランスター

第1話 報告（後書き）

次回から本格的にスタートします。

第2話 NEVER(前書き)

早いですが本編スタートです。

第2話 NEVER

とある管理世界

そこには破壊されたであろう違法研究所が合った

研究員1「きつ、貴様等何のつもりだ此処は管理局の施設だぞ……」

レイカ「はっ、何が施設よ、あんた等此処で子供を虐殺してただけじゃない」

研究員2「黙れ、あれは唯のプロジェクトFフエイトを用いて作ったクローン、言わば唯の人形だ人形をどうしようが我々の勝手だろう」

剛三「けっ、とことん腐ってやがんな！」

賢「どつする、克」?

克己「生き残った、子供は本部に連れて帰る…研究員は全員殺せ」

研究員1「!!!まっ、待ってくれ!頼む殺さないでくれ!」

京水「まったく、よくそんな事が言えるわね」

研究員1「頼む！目的は何だ、金か？金なら管理局に頼んでいくらでも出す、だから頼む命だけは」

バン！

研究員2「！！！！」

すると研究員の一人がそのまま倒れる

ティアナ「命乞いなんて、恥を知りなさい」

克己「ティアナか…」

ティアナ「克己、子供達は全員輸送機に乗せたわ、後始末は私がやる」

克己「いいのか？」

ティアナ「それぐらい楽勝よ」

克己「分かった…戻るぞ」

賢「OK…」

レイカ「ティアナ、早く終わらせなよ」

剛三「戻ったら一杯やろうぜ!!」

京水「そうだ、戻ったら赤مامシ飲まなきゃ」

克己達はそのままティアナを残し輸送機に向かう

ティアナ「さてと、」

研究員2「ひいつ!!」

ティアナ「最後の仕上げね」

ティアナは銃口を研究員に向け引き金を引いた

第2話 NEVER（後書き）

ティアナの性格は正直言って鬱かも知れません。

第3話 過去？（前書き）

今回は克己とティアナの出会いの話です。

第3話 過去？

輸送機内

克己「ガキ共は？」

ティアナ「全員寝てるわ…ねえ、あの子達はどつするの？」

克己「一度アジトに戻って検査をする、その後顔を整形でもしてどこかの次元世界の孤児院にでも預けるさ」

ティアナ「そう…そういえば、私が克己と合ってもう5年だったかな」

克己「実際は2年と1日だ、ティーダの葬式の際に初めて会ったその3年後にお前をNEVERに入れたからな」

ティアナ「そうだったわね…」

レイカ「ちよつと2人共、早く酵素打ちなさいよ…ほら」

レイカが2人に注射器の様な物を渡す

ティアナ「ありがとレイカ」

2人はレイカから注射器を受け取りそれを腕に打ち込む

克己（もう5年か…早いものだ）

克己は輸送機の窓から外を見ながらそう思っていた

5年前

ミッドチルダ とある居酒屋

克己「ふう、」

克己は居酒屋のカウンターで酒を飲んでいた

ティータ「ごめん、遅れた」

克己「遅いぞ、ティーダ」

するとティーダが現れ、克己の隣に座る

ティーダ「すまない、始末書に時間が掛かって」

店員「お客さん、ご注文は？」

ティーダ「そうだな…ねぎま、レバー、鳥皮と大根、こんにゃく、
がんもをお願いします」

店員「分かりました」

店員はそのまま克己達から離れる

ティーダ「まったく、遅れたのは謝るけど、お前よくミッドに来れるな、
店員にばれたら捕まるぞ」

克己「店員のお前がよく言えたな」

ティーダ「まったく……お前と初めて会った時を思い出すな」

克己「そうだな、俺が何度倒してもお前はしつこく立ち向かってきたからな」

ティーダの言葉に克己は苦笑した。

2年前、克己がミッドチルダに行った時、ティーダに出会い戦った
が決着が着いた後、2人の間には奇妙な友情が芽生えていた

克己「どうする、今から俺を捕まえるか？」

ティーダ「おいおい、お前を捕まえるなんて俺には出来ないって、
2年前お前にボコボコにされてるんだから」

克己「そうか、そうだったな」

2人はその後、様々な事を話し合った

克己「さて、俺はそろそろ帰るとするかな」

ティーダ「おい、本当に飯食いに来ただけなのか？」

克己「当たり前だ、それとお前に会うためにな」

ティーダ「そうか……克己、最後にこれだけは聞いてくれないか」

克己「何だ？」

ティーダ「もし俺に何か合ったら、妹を……ティアナを頼む」

克己「縁起でもない事を言つな」

ティーダ「そうだな、すまない」

克己はそのまま店から出る

その数カ月後

克己「ティーダが……死んだ？」

京水「ええ、任務中に亡くなったそうよ」

克己「……………そうか、」

克己はソファから立ち上がり壁掛けからジャンパーを手に取る

レイカ「どこ行くの？」

克己「ティーダの葬式に行く」

京水「ちよつと！？葬式には管理局がいっぱい参加するのよ！そこに行くなんて捕まりに行くようなもんよ克己ちゃん！！」

克己「友人の葬式には出る主義なんぞな」

克己はそう言うとドアを開けた

そして数日後、ミッドの墓地の場所では、多くの人がティーダの墓の前に集まっていた。

その中には、ティーダの妹であるティアナが、ティーダの墓の前で涙を堪えていると、ティーダの上司と思われる人物と局員達が侮辱の言葉を呟き始める。

上司「全く、犯人も捕まえぬ死ぬとは我々航空隊の恥さらしだ」

局員1「全くですな、奴には今までの功績から期待していたのに、とんだ期待はずれだったようだ」

局員達は墓の前だとゆうのにティータの侮辱の言葉を吐き続ける。

ティアナは顔を辛そうに歪めた瞬間

???「おい、」

上司「んっ？」

上司が後ろを振り向くと

克己「おら!!」

克己が上司の顔を力の限り殴った

上司「ぐはっ!!」

上司はそのまま地面に倒れ気絶する

局員1「貴様！何の真似だ！！」

局員2「！？お前は、大道克己！！」

克己「はあっ！！」

克己は抑えようとした局員達を殴り蹴り倒した

局員1「きつ、貴様！！」

克己「貴様等には死人に対する手向けも知らんのか！！」

克己は局員の腹を殴る

局員1「ぐはっ！！」

ティアナを除く全員を気絶させると克己は持っていた花束をティードの墓の前に供える

克己「すまない、ティードの墓で騒ぎを起こしてしまった」

ティード「大丈夫……ありがとう、兄さんの為にやってくれたんでしょ？」

2人はティードの墓の前に顔を向けると黙祷を行う

黙祷が終わるとティアナは克己に顔を向ける

ティアナ「……あなたは確か、広域次元犯罪組織のボスよね？兄さんとは知り合いだったの？」

克己「ああ、ティードとは友人だった」

ティアナ「!!……そう、」

克己「俺はこれで失礼する……最後に、」

ティアナ「……何？」

克己「俺はお前を見守っている」

ティアナ「え？」

克己「じゃあな……」

克己は墓から離れ墓には倒れた同員とティアナが立っているだけだった。

第4話 過去？（前書き）

今回はティアナsideの話です。

第4話 過去？

兄さんが死んでから3年、私は管理局に入ろうと一度は考えたが何故か気が進まず、独学で魔法を勉強している

食堂のおばさん「あら？ティアナちゃん、今から図書館かい」

すると、ティアナがよく行く食堂のおばさんが声を掛ける

ティアナ「はい、」

食堂のおばさん「そうかいがんばりな、そうだ、これ食べてせいでもつけな」

すると食堂のおばさんはティアナにおにぎりを二つ渡す

ティアナ「あつ、ありがとうございます」

ティアナは礼を言つとそのまま図書館に向かう

ミッドチルダ図書館

ティアナ「幻術魔法か…私が覚えるならこの魔法かな」

ティアナが図書館で調べ者をしてると

少女「やつ…やめて下さい」

チンピラー「いいだろ、今からさ、ちょっとお茶するぐらい」

チンピラー2「こいつの親父は管理局のお偉いさんなんだぜ、仲良くなったら徳だよ」

チンピラー3「そうそう、だからさ今から俺達と一緒にお茶でもしようよ」

柄の悪いチンピラー3人が一人の少女を囲んでいた

少女「本当にやめて下さい」

チンピラー1「そういわないでさ」

ティアナ「ちょっと、」

チンピラ1「ああ?」

ティアナ「やめなさいよ、嫌がつてるでしょ」

チンピラ2「何だてめえ?」

チンピラ3「俺達とやんのか?」

チンピラ1「ん?おいおい、よく見たら結構かわいいじゃん、なあ
お前も今から俺達と一緒にお茶しないか?」

ティアナ「結構よ、ほら行きましょ」

ティアナは少女の手を取りその場を離れようとするが、

チンピラ1「おい、待てよ」

チンピラのリーダーらしき男がティアナの肩を触ろうとした時

グッ！

ティアナはチンピラの腕を？み折り曲げる

チンピラー「いでででで！！」

ティアナ「図書館は本を読む場所よ、ナンパする場所じゃないの、さっさと出て行きなさい」

チンピラー「てっ、てめえ覚えてろよ！」

チンピラはそう言つとその他のメンバーを連れて図書館から出て行く

ティアナ「大丈夫？」

少女「あっ、ありがとうございます」

少女はティアナに礼を言う

ティアナ「気にしないで、じゃあ私は調べ物があるから」

ティアナはそう言うと自分が座っていた椅子に戻る

ティアナが図書館から出たのはもう日が沈みかけていた時だった

ティアナ「すっかり、遅くなっちゃったな、急いで帰らなきゃ」

ティアナはそのまま家に向かう

ティアナ「……………んっ？」

するとティアナは後ろから妙な視線を感じた

ティアナ「確かコンパクトは」

ティアナはバッグからコンパクトを取り出し髪を整える振りをして鏡から後ろを見る

すると昼間のチンピラが仲間を連れてティアナに着いて来ていた

ティアナ（昼間のあいつ等か……しょうがない）

ティアナはわざと人気ひんげのない通路に移動し、ある工事現場に着く

ティアナ「いいかげんかくれんぼはやめたら？」

ティアナがそう言つとチンピラ達が出てきた

チンピラ1「てめえ、昼間はよくもやってくれたな」

ティアナ「あんた等が悪いんでしょ……」

チンピラ1「うるせえ！！覚悟しろよ、今から俺達に齒向かったら
どうなるか教えてやるぜ」

チンピラ4「なあ、その前にこの女犯しちゃおうぜ」

チンピラ3「そうそう、けっこの美人だしさ」

チンピラ2「おいおい、お前等ロリコンかよ……」

ティアナ「……本当の屑ね、あんた達」

チンピラ5「んだと!!」

チンピラ1「やっちまえ!!」

リーダーの言葉で他のチンピラがティアナに襲い掛かる

チンピラ3「お譲ちゃん、おとなしくしてな!!」

チンピラの一人がティアナを捕まえ様とするがそれよりも早くティアナがチンピラの懐にもぐりこみチンピラの顔面を殴る

チンピラ3「ぐはっ!!」

チンピラ2「てめえ!!」

するとチンピラの一人がそばにあったパイプでティアナに襲い掛かるがティアナはパイプを軽くかわしチンピラの背中に蹴りを入れる

チンピラ2「ぐえっ!!」

チンピラ5「この野郎!!」

チンピラがティアナに殴りかかるがティアナは拳を受け止め右手でチンピラに目潰しをする

チンピラ5「ぐわっ!!」

チンピラ4「ひっ、ひい!!」

ティアナ「ほら!!」

チンピラの一人が逃げ出そうとしたがティアナはチンピラに向けてもう一人のチンピラの持っていたパイプをチンピラの向けて投げる

ゴン!!

チンピラ4「ぐえっ!!」

パイプはチンピラの頭に当たり男はその場に倒れる

チンピラー「うっ、このアマー……！」

リーダーのチンピラは懐から拳銃を取り出し、ティアナに向けて撃つ

バン！

ティアナ「うっ！」

弾はティアナの腹を貫通しティアナはその場に倒れる

チンピラー「えっ？……ひい……！」

チンピラは地面に拳銃を捨てる

チンピラ3「なっ！何やってんだよ……？」

チンピラー「ちっ、違う……！俺は唯、びびらせようとして撃っただけだ、当てる気なんてなかったんだ……！」

チンピラ2「どっ、どうすんだよ？」

チンピラ1「決まってるだろ！逃げるぞ！！」

チンピラ5「あっ、ああ！」

リーダーの言葉にチンピラ達はその場を離れようとしたが

チンピラ2「おっ…おい、あれ」

チンピラの男が指をさすとそこには一人の男が立っていた

チンピラ3「みっ…見られた」

チンピラ5「どっ…どうする？」

チンピラ1「きつ、決まってるだろ…見られたからには…生きて返すわけにはいかねえだろうが！！」

リーダーの男は落ちていた拳銃を拾うとその場にいた男に向けて撃とうとしたが

バン!!

チンピラ1「ぐえっ!」

それよりも早く男がチンピラの心臓を銃で打ちぬく

チンピラ2「ひい!!」

?????」……………」

男は持っていた銃を他のチンピラに向ける

チンピラ2「まっ、待ってくれ!見逃して……」

バン!

チンピラ2「ぐはっ!」

チンピラの頭部を弾が貫通する

チンピラ3「うっ……うわああああー!!」

残りのチンピラが逃げようとした時が

バアン！バアン！バアン！バアン！バアン！

男はチンピラ達が逃げ出した方向の真上に向けて弾を撃った

チンピラ5「へっ、何処狙って……え？」

チンピラが上を向くと工事現場の機材がチンピラ達に向かって落ちてきた

チンピラ3・5「うわああああああー!!」

チンピラ2人はそのまま機材の下敷きになる

「????」……………」

男はそのままティアナの方に歩みだす

ティアナ「あつ……あなたは？」

????「すまない……お前を守れなかった」

ティアナ（かつ………克己さん？）

ティアナはそのまま静かに目を閉じた

克己「ティアナ………」

克己は無言でティアナの亡骸を抱えその場を離れた

そして後には、四つの死体と気絶したチンピラがいるだけだった。

第4話 過去？（後書き）

まあ、これがティアナがNEVERに成った、経緯です。

ご感想の方もよろしくお願いします。

第5話 過去？（前書き）

思った以上に過去編が長引きそうです。

第5話 過去？

NEVERアジト

マリア「……………」

克己の母でありNEVERの幹部でもあるプロフェッサー・マリアはティアナに目を向ける

京水「中々かわいいじゃない…でも、私の方がおっばいおっきいわ……私の方がおっばいおっきいわ……」

剛三「うっせーぞ！京水」

克己「2人共黙ってる」

京水「ごめんなさい、克己ちゃん」

剛三「すまねえ」

克己「御袋、頼む」

マリア「分かったわ、克己」

マリアはそのままティアナに細胞維持酵素を打ち込む

ティアナ「……………」

克己「…………ティアナ」

ティアナはゆっくりと目を開ける

ティアナ「……………此処は、あの世？」

克己「いいや、まだこの世だ」

ティアナ「！？克己さん！何で、私確か拳銃で撃たれて」

克己「ようこそ…死神の世界に」

ティアナ「えっ？」

京水「アンタは助かった訳じゃない、死人なのよ」

ティアナ「私が……死人？」

マリア「この細胞維持酵素を定期的に注入しなければ、あなたはたちまち死体に逆戻りする」

克己「それが俺達、NEVERだ」

ティアナ「NEVER……」

克己「今日はこれくらいだ、お前の部屋を用意してある……もう寝ろ」

ティアナ「待って下さい！……克己さん、何で私をNEVERにしたんですか？」

克己「……………」

ティアナ「兄さんとの約束の為ですか？」

克己「身勝手だとは思っているだが、俺はこつする事しか出来ない」

克己はそう言つと椅子に座る

ティアナ「……………克己さん、」

マリア「もう寝なさい、レイカ彼女を部屋に案内して」

レイカ「分かった…着いて来て」

ティアナ「はっ、はい」

ティアナはレイカの後に着いて行く

そして2人は一つの扉の前で止まる

レイカ「此処がアンタの部屋、私の部屋は隣だから何か合つたら来なさい」

ティアナ「はい、」

レイカ「それじゃ、おやすみ」

ティアナ「おやすみなさい……」

ティアナはそのまま部屋に入る

部屋の中は机と椅子、ベット、タンスとシンプルな部屋だった

ティアナ「……………」

ティアナはそのまま無言でベットの中に入る

ティアナ（冷たい……）

ティアナは自分の体を触りその冷たさに驚く

ティアナ（私、本当に死んだんだ……………これからどうなるんだろ？）

ティアナは不安に駆られながらもそのまま眠りに着く

第5話 過去？（後書き）

アンケート

ティアナはドーパントになる時、どのメモリがいいですかね、E、C、H、L、M、T以外で感想と一緒に送って下さい

第6話 過去？（前書き）

今回はティアナのバトルシーンが多めです。

第6話 過去？

翌日

ティアナ「……………」

ティアナは目を覚ますとベッドから起き上がり洗面所に向かう

レイカ「おはよう、昨日はよく眠れた？」

ティアナ「え？…はい」

レイカ「そう、顔洗ったら昨日の所に来て、克己が呼んでるから」

ティアナ「分かりました」

ティアナは顔を洗うとすぐに昨日いた場所に向かった

克己「来たか、ティアナ」

ティアナ「あの、何の用事ですか？」

克己「ああ、ティアナお前強くなる気はないか？」

ティアナ「え？……」

克己「此処には俺を含め、戦闘のプロが多くいるそいつらに教わればお前はかなり強くなると思う、どうだ？」

ティアナ「……………」

克己「嫌ならそれでも良い、そのかわりお前は御袋の手伝いでも……」

ティアナ「やります……」

克己「……………」

ティアナ「やらせて下さい……私、強く成りたいんです……！」

克己「分かった、じゃあ1時間後に地下の訓練場に来い」

ティアナ「はい!！」

克己「では一時間後…」

克己はそのまま部屋を出て行く

マリア「ティアナ…」

ティアナ「はい、…あなたは？」

マリア「プロフェッサー・マリア、克己の母よ」

ティアナ「克己さんの、お母さん……」

マリア「渡しそびれてたわ…はい、これ」

マリアはそう言うとダンボールの箱をティアナに渡す

ティアナ「あの、これは？」

マリア「あなたの家から持ってきたの、あなたのお兄さんの形見と写真、服、その他重要な物を入れておいたわ」

ティアナ「ありがとうございます……あの、兄のデバイスは？」

マリア「今、貴方用に改造してる所よ、たぶん三ヶ月から半年は掛かるわね」

ティアナ「そんなに掛かるんですか!？」

マリア「私はデバイスとかの作成や調整は苦手なの、勘弁して」

ティアナ「……………分かりました」

ティアナはそのまま部屋に戻る

一時間後

ティアナは地下にある訓練場に着いた

そこには克己を含むNEVERのメンバーがいた

克己「ティアナ、顔は合わせているが紹介して置こう…NEVERの副官を務めている泉京水、基本的にはお前のバックアップをしてくれる」

京水「よろしくね、子猫ちゃん」

克己「こいつとは何度か会ってるだろう、羽原レイカ、主に格闘戦を教える」

レイカ「よろしく、ティアナ」

ティアナ「よろしくおねがいます…」

克己「そして、芦原賢と堂本剛三だ…賢は銃撃戦を剛三は棒術などの接近戦を教える」

賢「よろしく…」

剛三「よろしくな…」

克己「ティアナ、一応お前も挨拶しておけ」

ティアナ「はっ、はい……ティアナ・ランスターです、ご指導の程
お願いします」

ティアナは克己達に向かって頭を下げる

克己「さて、それじゃあまずティアナ、お前の実力をしりたい、今
からシュミレーション訓練をするからお前の実力を見せる」

ティアナ「はい！」

克己達はそのまま訓練場から出て行き隣のオペレーション室に入る

克己「いいかティアナ、これからシュミレーションとして空戦魔道
師5人を倒す訓練をする」

ティアナ「それって……1人で5人を倒せって事ですか？」

克己「そうだ……無理か？」

ティアナ「いえ、大丈夫です……あの、デバイスは？」

克己「ない……」

ティアナ「ええ！？」

克己「あくまでも、自分の力だけで倒せ」

ティアナ「そんな無茶な……」

克己「無茶でもやれ」

ティアナ「……分かりましたよ、やれば良いんですよ」

克己「それじゃあ、訓練開始だ……」

そう言うと、訓練所に立体映像の魔道師が5人現れる

克己「いいか、訓練の内容はこうだ、お前は魔道師の攻撃をかわしながら敵を一人残らず倒す、この場にある物は全て利用していい」

ティアナ「分かりました…」

克己「それでは…訓練開始」

すると魔道師5人がティアナに接近して来た

ティアナ「くっ!!」

魔道師は砲撃魔法を放ちながらティアナに近づく

ティアナは攻撃をかわしながら次の一手を考えていた

ティアナ（この場にある物って言うても、何を使えばいいってゆうのよ、この場にある物?……）

ティアナはある事に気づく

ティアナ（この場にある物は何でも使っているのよね…だったら!）

ティアナは攻撃をかわしながら魔道師達に向かって行く

ティアナ「はあ!!！」

ティアナは立体映像の魔道師の一体にとび蹴りをくらわすと魔道師が持っていたデバイスを奪う

ティアナ「おら!!！」

ティアナはデバイスを右にいる魔道師に投げつける

レイカ「へえ、中々やるじゃない、あの子」

剛三「ああ、結構強え」

克己「当たり前だ、あいつの妹だぞ」

ティアナ「はあ!!！」

ティアナは再び、魔道師からデバイスを奪うとそれを槍の様に使い、隣にいた魔道師を突く

左にいた2人の魔道師が、ティアナに攻撃をしかけるがティアナはそれをジャンプしてかわす

ティアナ（うそ、体が軽い…何か、死ぬ前より強くなってる）

ティアナは自分の体の変化に驚く

魔道師はティアナに砲撃魔法をしつこく放つが、ティアナは軽々とかわし

魔道師の一人をデバイスで突き刺し、最後の一人をとび蹴りで倒す

ティアナ「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

ティアナはそのまま膝を付く

克己「よくやった、ティアナ」

すると克己達が訓練場に現れる

ティアナ「克己さん……」

克己「上出来だ、冷静な判断力、行動力、そして戦闘力、お前は見込みがある」

ティアナ「ありがとうございます」

克己「明日から、本格的な訓練だ覚悟しておけよ」

ティアナ「はい！」

克己「それじゃあ、飯にでもするか」

克己達はそのまま訓練場を出る

第7話 過去？（前書き）

今回は管理局 s i d e の話です。

第7話 過去？

ミッドチルダ

そこでは管理局地上部隊陸士108部隊がある事件の調査をしていた

ギンガ「ゲンヤ三佐、執務官の方が来られました」

108部隊の魔道師、ギンガ・ナカジマは父であり上司のゲンヤ・ナカジマに執務官が来た事を報告する

ゲンヤ「そうか、通してくれ」

フェイト「どうも、管理局執務官フェイト・T・ハラウオンです」

すると長い金髪の女性がゲンヤの前に現れる

ゲンヤ「陸士108部隊部隊長ゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

フェイト「それでは、現場の方を」

ゲンヤ「ああ、こっちだ」

ゲンヤはフェイトを現場に連れて行く

フェイト「これは……………」

ゲンヤ「ああ、酷いもんだ、一人は心臓を打たれ即死、一人は頭を打たれて即死、2人は落ちてきた機材で死んでいる」

フェイト「確か…一人だけ生存者がいたはずですが？」

ゲンヤ「そいつは今病院にいる、どうやら頭を強くパイプで叩かれたようだ」

フェイト「そうですか…目撃者は？」

ゲンヤ「いや、いねえ…だが、現場にこれが落ちていた」

ゲンヤはそう言つとフェイトにある物を見せる

フェイト「それは！？まさか、質量兵器？」

ゲンヤ「ああ、その通りだ…後、見せたい物があるんだが…いいか？」

フェイト「ええ、」

ゲンヤはそう言うところを指差す

フェイト「これは…血？」

ゲンヤ「ああ、おそらくは被害者の内の誰かだと思ったんだが……」

フェイト「どうしたんですか？」

ゲンヤ「誰とも合わなかったんだ…心臓を撃たれた奴と下敷きになった奴の一人はO型、頭を打たれた奴と下敷きになったもう一人と病院にいる奴がA型…だが、この血はB型だ…おそらくは」

フェイト「犯人の血…ですか、」

ゲンヤ「ああ、今DNAでその人物を調べてる所だ……それと、」

フェイト「それと？」

ゲンヤ「ああ、実は昨日から部屋に戻ってない奴がいるって、マンシヨンの大家が局に報告してたらしい」

フェイト「それは……誰ですか？」

ゲンヤ「ティアナ・ランスター」

フェイト「ランスター……もしかしてその子、」

ゲンヤ「ああ、3年前に死んだ、航空隊のティード・ランスターの妹だ」

フェイト「……………まさか、その子がこの事件の犯人だと……………」

ゲンヤ「出来ればそんな事を考えたくはねえがな」

ギンガ「父さん！」

ゲンヤ「どうした？ギンガ」

ギンガ「今鑑識から報告が合ったわ、その血のDNAとティアナ・ランスターのDNAが一致したって」

sideティアナ

ティアナ「へっ、きしっ！」

レイカ「どうしたのティアナ、風邪？」

京水「誰かがあんたの噂でもしてるんじゃないの？」

ティアナ「そうかな？…」

克己「ティアナ、訓練再開するぞ」

ティアナ「分かった、」

その数日後、ティアナは次元犯罪者と成った

第8話 過去？

ティアナがNEVERに入ってから半年後

克己「よし、今日はここまでだ」

ティアナ「分かった、」

ティアナは賢との模擬戦をやめる

賢「グツジョブ」

ティアナ「ありがと、賢」

レイカ「ティアナ、プロフェッサーが呼んでるよ」

ティアナ「プロフェッサーが？何の様だろ」

ティアナは着替えるとすぐにプロフェッサーの下に向かった

ティアナ「何か様ですか、プロフェッサー」

マリア「ええ…ティアナ、あなたのデバイスが完成したわ」

ティアナ「本当ですか！、やっと完成したんだ」

マリア「ティアナ、これが貴方のデバイスよ」

マリアはそう言うとティアナに黒い長方形のデバイスを渡す

ティアナ「これが……」

マリア「名前はクロスファントム、銃撃戦に特化したデバイスよ」

ティアナ「クロスファントム……」

克己「ティアナ」

ティアナ「克己！」

克己「デバイスも出来た頃だしお前もかなり強くなった、そろそろお前も仕事をする日が来たようだな」

ティアナ「仕事？」

克己「ふっ、傭兵だよ」

ティアナ「傭兵？……」

克己「ああ、出発は明日だその間に体を休ませろ」

現在

ティアナ「今思えば、あの日からかな、私が変わったのは……」

克己「そうだな、」

ティアナ「あの日から私は人殺しを始め……そして、管理局を敵と見なした」

ティアナは拳を強く握りしめた

第8話 過去？（後書き）

クロスファントム

原作のクロスミラージュが黒くなったようなデバイス

能力もクロスミラージュとあまり変わらない。

第9話 過去？（前書き）

今回は少し暗めです。

第9話 過去？

第43管理世界アネクメネ

克己達はこの世界で依頼相手に会いに着ていた

ティアナ「しかし、名前の割りにはそこまで酷い場所じゃないわね」

ティアナは街を見渡しながらそうつぶやく

アネクメネとは本来人の居住できない、あるいは非常に困難な地域をさす言葉であるがこの世界は確かに外は危険生物が多く生息しても人が住める場所ではないが街の中は人がごった返してもにぎやかな街であった

京水「これでも100年前はとも人が住める所じゃなくて、皆地下で暮らしてたらしいわ」

ティアナ「そうなんだ…」

そんな会話をしていると

「????」「たっ、大変だー!!」

すると突然、傷だらけの男が大声を上げながら街の広場に向かって来た

「おいどうしたんだ？」

傷だらけの男「皆早く家の地下に隠れる！ガレオスの群れが街に向かってきてる!!」

「なっ！何だって!？」

男の言葉に回りにいた人々は大声を上げながら逃げ惑う

レイカ「何？この状況」

京水「どうやら、危険生物がこの街に来るようね」

剛三「克己どうする?」

克己「さて…どうした物か」

克己が悩んでいると

「???」兄ちゃん達何やってんだよ!!

一人の子供が克己達に声を掛ける

京水「なあに?僕ちゃん」

「???」早く自分の家に戻れよ、そうしないとガレオス達に食われちまうぞ!!

ティアナ「そうしたいのは山々何だけど、私達用事が合つてこの街に来たから家なんて無いのよね」

「???」だったら、俺んちに来いよ、俺んちは俺と母ちゃんだけで地下室も広いんだ」

ティアナ「いいの?」

「???」困つた時はお互い様だろ」

克己「なら厄介になろう…ガキ、名前は？」

オアシス「オアシスだ」

ティアナ「オアシス？変わった名前ね…私はティアナ、よろしくね
オアシス」

オアシス「うんよろしく、オアシスって名前は父ちゃんが付けてくれたんだ、オアシスみたいに人の心や体を癒せる人間に成れって付けた名前なんだって…って！そんな事言ってる場合じゃなかった！早く隠れなきゃ！着いて来て！」

克己「行くぞ」

ティアナ「ええ」

克己達はオアシスに着いていき、ひとつの民家で止まった

オアシス「此処がおいらの家、入って」

オアシスは克己達を家の中に入れる

オアシス「ほら、此処が地下室の入り口、早く入ってガレオス達が来ちゃう」

克己達はオアシスに言われ地下室に入る

克己「ほお、思ってた物より広いな」

地下室の中は大人10人が入れるだけのスペースが合った

????「あの、どちら様ですか？」

すると地下室にいた女性が克己達に声を掛ける

克己「ああ、すまない俺達はそこにいるオア、」

オアシス「母ちゃん、こいつ等旅人らしいんだ、だからお願いこいつ等も地下に入れてあげてくよ」

????「そうだったんですか、どうぞ遠慮なさらず座ってください」

克己「感謝する」

ハンナ「オアシスの母親のハンナと言います、遠い所から遙々と大変だったでしょう」

克己「いえ、そうでも……しかしこの街は大変ですね、昼間からガレオスの様な猛獣の群れが現れるなんて」

ハンナ「それでも15年前まではこの街は……いえ、この世界はとても平和だったんです」

克己「何？」

グオオオオオオオオ!!!

すると遠くから獣の叫び声が聞こえる

ハンナ「!!!……その話はガレオス達が街から出て行った後で」

克己「そうだな、」

克己達はそれから地下室でガレオスが街から離れるのを待ち、30分後、辺りが静かに成る

オアシス「ガレオス達は行っちゃったかな？」

ハンナ「まだ出ちゃ駄目よ、鐘の音が聞こえてから」

ゴーン、ゴーン、ゴーン

すると辺りに鐘の音が響き始める

オアシス「鐘が聞こえた！やっと出られる」

オアシスはそう言つとすぐさま地下室から出る

ハンナ「こらオアシス！…もう、あの子ったら」

剛三「元気があって良いじゃねえか」

ハンナ「恥ずかしい所を見せてしまいましたね」

克己「気にしないでくれ…剛三の言つとおり、子供は少し元気すぎる方が良い」

ハンナ「そうですか、でも母親としてはもう少しお淑やかにしてくれれば」

京水「どうして？男の子は元気が一番よ…私は、レディーだけどね」

ハンナ「男？…はあ、やっぱりそう見えますよね」

ティアナ「えっ？それって…」

ハンナ「オアシスは女の子の何です。」

ティアナ「ええ！そんなんですか！？ごめんなさい、私てつきり」

ハンナ「いいんですよ、母親の私もたまに本当は男の子何じゃないかって思つ時がありますもの」

克己「それはともかくハンナさん、さっきの話の続きを聞かせてくれないか？」

ハンナ「そうですね…じゃあまず、外に出ましょう」

克己「そうだな、此処は少し息苦しい」

克己達は地下室から出てハンナの話聞く

ハンナ「まずはこの世界の話をしましょう…此処アネクメネは100年前までガレオス達の様な、猛獣達が昼も夜も徘徊して、私達の祖先は暗い地下での生活を余儀なくされていました、ですが100年前、一人の男がある石を見つけてから私達の祖先は地上で暮らせる様に成ったのです。」

克己「その石とは？」

ハンナ「はい、私達はその石を魔除けの石と呼んでいます、理由は分かりませんがガレオス達はその石を恐れていて魔除けの石がある所には絶対猛獣は来ないんです。」

京水「それが何で、あんな奴等が出るようになったの？」

京水がそう言うとハンナは急に暗くなり顔をうつむかせる

ハンナ「……15年前です、突然空から無数の船が降りてきたんです」

ティアナ「無数の船？」

ハンナ「その船に乗っていた者達は、我々は時空管理局だ貴方達が持っているロストロギア、エルトライトは我々が管理するからエルトライトを渡せと言い出したんです」

ティアナ「時空管理局が!？」

克己「そして……」

ハンナ「当然、私達は断りました、魔除けの石が無かったら街は猛獣達に襲われ、人々の血が流れます、だから私達は断りました……
だけど、」

克己「だけど?……」

ハンナ「あいつ等は、それならば武力介入してもロストロギアを確保をすると言いました」

ティアナ「そんな……」

ハンナ「当時、各街の長老達は兵士を集め時空管理局に戦いを挑みました……ですが、」

克己「結果は完敗だった、」

ハンナ「はい……こちらは大勢の犠牲を出しましたが、結局は奴等の見たことも無い兵器によって……そして魔除けの石は全て奪われ、奴等はこの世界を管理するといいいこの世界にある唯一のオアシスに基地を構え、そこに居座っているのです……」

克己「では、貴方達が使う水は？」

ハンナ「一ヶ月に一度、管理局の魔道師が現れ……水と食料を配給しますが……あんな量では一ヶ月、持つかどうか……」

レイカ「他にオアシスは無いの？」

ハンナ「あるにはあるのですが：他のオアシスは全て猛獣達の水のみ場で、行ったら死んでしまいます……それに、」

克己「それに？」

ハンナ「奴等はたまに街に来ては街の者に暴力を加え、自分たちに逆らった街の者を捕まえるの、しかも魔力値とゆう物が高いとゆう理由だけで子供を連れて行くのです。」

レイカ「ひどい話ね」

克己「道理で、俺達に依頼が来るわけだ」

ハンナ「えっ？」

克己「ハンナさん、アンタ赤いオアシスの居場所を知らないか？」

ハンナ「！！何故、貴方がその名を！？」

克己「知っているんだったら、赤いオアシスにこう伝えてくれ、禁断の果実が来たと」

ハンナ「……まさか貴方達が……」

克己「そう、禁断の果实だ」

第9話 過去？（後書き）

今回はモンスターハンターのカレオスとエルトライト鉱石を出しましたが、オリジナル設定としてエルトライトにはモンスター除けの力がある設定にしました。

モンハンファンで気分を害した人は申し訳ありません、

ちなみに禁断の果実とはNEVERのエンブレムの林檎を意味しています

次回もお楽しみ下さい

第10話 過去？（前書き）

これから夏休みなので更新は早いと思います。

楽しみにして下さい。

第10話 過去？

アネクメネ管理局部署

「???」何？テロリスト共が傭兵を雇った」

「???」はい、どうしますか？」

「???」ふん、無能な奴等に我々管理局の力を見せ付けるだけだ」

「???」では……」

「???」ああ、すぐに局員を集め近くの街に行くぞ」

局員は不気味な笑みを浮かべる

克己達はハンナに連れられ地下からの秘密の通路を通っている

ハンナ「驚きました、あなたがハンスの言っていた禁断の果実だとは」

克己「俺も驚いている、まさかあなたが赤いオアシスのメンバーとは」

ハンナ「この街のほとんどの人が赤いオアシスのメンバーや協力者です」

ティアナ「……………ねえ、京水さん赤いオアシスとか禁断の果実って何？」

京水「あんたそんな事も知らないの？…赤いオアシスはこの世界で管理局を追い出そうとしてるレジスタンスの事、禁断の果実は私達 NEVER が使ってる合言葉みたいな物よ」

ティアナ「はあ？」

京水「私達はけっこう裏の世界じゃ有名だから、こつとして合言葉や暗号で傭兵仕事を請け負ってるの」

ティアナ「へえ、そうなんだ」

ハンナ「着きました、」

そうこうしているとハンナは一つの扉の前で止まる

克己「ここか…」

コンコン

ハンナは扉を叩く

????「非情な、」

ハンナ「太陽…」

するとハンナと扉の前の男が合言葉を言い合い扉が開く

????「ハンナ…一体どうしたんだ？」

ハンナ「ホセ、禁断の果実を連れてきたわ」

ホセ「何だつて！まさかこいつらが？」

ホセと呼ばれた男は克己達の方を見る

ホセ「とりあえず、中に入ってくれ」

そう言われると克己達は部屋の中に入る

中では赤いオアシスの幹部達が会議をしていた

幹部1「やはり、すぐに仕掛けるべきだ！」

幹部2「いや、今は戦力を整えるべきだ！」

ホセ「皆！！」

幹部1「どうしたんだホセ、そいつ等は？」

ホセ「禁断の果实だよ！禁断の果实が来てくれたんだ！」

幹部2「何だと！じゃあこいつ等が！？」

克己「そちらのリーダーと話がしたいのだが」

幹部2「分かった…長老を呼べ」

幹部の一人がそう言うと一人の男が長老を呼びに行く

数分後 男が一人の老人を連れてきた

長老「貴方達は禁断の果実…いや、NEVERの皆様でよろしいかな？」

克己「ああ…依頼主はあんただな」

長老「はい、リーダーのハッサムと申します」

克己「それでやはり依頼の内容は」

ハッサム「はい、我々と協力して管理局を倒して下さい」

克己「金は？」

ハッサム「おい、あれを持って来い」

すると数人の男がそれぞれ一つずつ、トランクを持ってくる

ハッサム「金はありませんがそれと同等の物を用意しました」

ハッサムはトランクを開ける…その中には

克己「金か…」

ハッサム「はい、まだ奴等には知られていませんが、この国はこの様な金きんが多くあるのです」

克己「いいだろう、契約成立だ」

克己はハッサムと固く握手する

「大変だー！！！」

幹部2「おい、今交渉中だぞ！」

「それどころじゃない！大変なんだ、管理局が…」

幹部2「管理局がどうしたんだ？」

「管理局の奴等が街を襲ってる！！！」

幹部1「何だと！！！」

克己「！！！！！」

幹部2「長老！」

ハッサム「急いで街に向かうぞ！！！」

そう言うと赤いオアシスのメンバーはそれぞれ武器を持ち外に出て行く

京水「どうする、克己ちゃん？」

克己「行くぞ、契約は成立してるんだ」

剛三「おっしゃー！行くぜー！！」

ティアナ「……………」

レイカ「どうしたの？ティアナ」

ティアナ「何でもない、大丈夫」

克己達もそのまま赤いオアシスに着いて行く

ティアナ（何なの？この胸騒ぎ？）

第10話 過去？（後書き）

感想とアンケートもよろしくお願いします。

第11話 過去？

克己達が街に着いた時、そこはもう戦場と化していた

管理局の魔道師は総勢15名に対して赤いオアシスは100名近い戦力と言えば赤いオアシスの有利なのだが……

魔道師1「死ね!!」

魔道師は赤いオアシスのメンバーに向けて魔弾を放った

「ぐわあああ!!」

「ぎゃあああ!!」

弾は直撃し赤いオアシスのメンバーは倒れる

克己達は戦闘訓練や魔道師との戦い方を熟知しているが赤いカナリアのメンバーは戦闘経験も浅く魔道師との戦い方も知らず、結局は魔道師と魔法を使えない者、いくら数で勝っていても勝負にならない

剛三「克己！」

克己「それぞれペアを組んで魔道師を叩くぞ、京水は賢とレイカは剛三とティアナは俺と来い」

京水「分かったわ」

賢「GAME START…」

レイカ「やるとしますか」

剛三「おっしゃー！腕がなるぜー！！」

京水達はそれぞれ魔道師に向かって行った

克己「行くぞ、ティアナ」

ティアナ「はっ、はい」

克己とティアナも移動を始める

魔道師「貴様ああ!!」

魔道師の一人が克己に気づき攻撃を仕掛けようとしたがそれよりも早く克己が動いた

克己「はあ!!」

ブシュ!

魔道師「ぐえっ!!」

克己は持っていたナイフで魔道師の喉元を切り裂き、魔道師の喉から血が噴水の様に溢れ出した

ティアナ「うっ………うええええ」

ティアナはその光景を見ると口を押さえたがすぐに嘔吐した

克己「大丈夫か?ティアナ」

ティアナ「……………ごめんなさい、やっぱり私には人殺しなんて」

克己「……………そうか、だったらお前は生きている住民を此処から避難させる…それと、危なくなったらすぐに俺を呼べ、良いな」

ティアナ「はい…分かりました」

克己とティアナはそのまま別れ克己は魔道師を倒しにティアナは住民を助けに行った

sideレイカ、剛三

レイカ「はあああ!!」

「ぐわっ!!」

レイカは魔道師に回し蹴りをくらわし壁に叩きつけた

剛三「おらああああ!!」

「ぐわあああ!!」

剛三は得意の棒術で魔道師をなぎ倒す

side 京水、賢

京水「行くわよー」

京水はムチを振るい魔道師を叩きつける

「ぎゃあああ!!」

京水「あんたは私のタイプじゃないわ、ばい!」

京水はムチで魔道師を巻き付けそのまま投げ飛ばした

賢「……………」

ガガガガガガガ!!

賢はマシンガンを魔道師に向けて乱射する

「へっ、そんな物効くかよ」

魔道師はたやすく攻撃をかわしたが

賢「GAME OVER」

賢は懐からピストルを取り出し魔道師に向けて撃つ

「ぐわっ…！」

ピストルの弾は魔道師の心臓を貫き魔道師はそのまま倒れる

side 克己

「しゅおおお…！」

克己「はあああ…！」

克己は迫ってきた魔道師を蹴り飛ばしその反動を利用して後ろにいた魔道師の後ろに着地する

「何!？」

克己「ふん!!」

「ぐえっ！」

克己はナイフで魔道師の心臓を突き刺した

克己「……ティアナはちゃんとやっているのか？」

克己はティアナの心配をしながらも又、魔道師達の相手をする

sideティアナ

ティアナ「ほら、早く逃げて」

「ありがとうございます」

ティアナは住民を安全な所に誘導し終え取り残されている者がいないか探し初めた

ティアナ「誰かまだいる人は……」

ティアナが辺りを見回すと

バアン！！

ティアナ「！！！！」

近くで銃声のような音が聞こえティアナは急いで音のする方へと向かった

そこには

ティアナ「……………！！オアシス！！」

胸を打たれ倒れているオアシスがいた

「たく、ガキのくせに管理局に逆らうとは馬鹿なガキだぜ」

そしてその隣にデバイスを構えている魔道師が一人たたずんでいた

ティアナ「どうして……」

「ん？何だ、お前も反逆者の一人か」

魔道師はティアナにデバイスを向ける

ティアナ「何で、この子が何をしたってゆっの？」

「ふんっ！この街の人間は我ら管理局に齒向かったそれだけでも大罪だ、無論…男、女、子供、関係なくこの街の人間は全て皆殺しだ……無論、貴様もな」

魔道師はティアナにデバイスを向ける

ティアナ「これが管理局のやり方なの？」

「死ね……」

魔道師は魔弾をティアナに向けて放つ

ティアナ「うっ！」

弾はティアナの心臓を撃ちぬいた

「愚かな女だ」

魔道師がその場を立ち去ろうとした時、

ティアナ「許さない、」

「!!!!」

ティアナ「私はお前を……いや、管理局その物を許さない!!」

「馬鹿な!!! 確かに心臓を打ち抜いたはず!?!」

ティアナ「クロスファントム!」

ティアナはクロスファントムを起動させる

ティアナ「クロスファイヤー！」

「ひっ！」

ティアナ「シュート!!！」

「ぎゃああああ!!！」

漆黒の魔弾が魔道師を貫いた

ティアナ「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

ティアナは荒々しく息を吐く

オアシス「うつ…あつ、」

ティアナ「!?オアシス!!！」

ティアナはかすかに息のあるオアシスの元に駆け寄る

オアシス「ティ…アナ…姉ちゃん……」

ティアナ「しっかりして！死んじゃ駄目！」

オアシス「なんか…変な気分なんだ……痛いはずなのに……痛くないんだ」

ティアナ「……………」

オアシス「俺…将来医者になりたかったんだ…皆を助ける医者に」

ティアナ「成れるよ、だから早く治療を」

オアシス「成りたかったな……………」

オアシスはそのまま静かに目を閉じた

ティアナ「オアシス!!……………」

ティアナはそのまま黙り込む

その頃

「ばつ、馬鹿な！我々管理局が！？こんな奴等に！」

そこには克己達と克己達によって倒された魔道師の死体と指揮官が一人だけ立ち尽くしていた

克己「どうやら、お前の行く場所は決まったようだな」

「何!?!」

克己「地獄だ」

克己はそう言つと指揮官に向けてナイフを放つ

「ぐえつ!!」

ナイフは指揮官の眉間に深く突き刺さり指揮官は息絶えた

克己「……………」

克己は指揮官の死体に近づき眉間に突き刺さっているナイフを引き抜く

それをみていた赤いオアシスのメンバーは

「かつ…勝った、俺たちの勝利だあああ…!!」

「うおおおおおおお!!」「」

辺りに歓声が響き渡る

克己「……………」

克己はそんな事は気にせずティアナを探しに行く

幹部2「あんた達のおかげだありがとう!!」「」

剛三「いや、どうってこたねえよ」

幹部1「これで俺達は管理局から解放された！」

赤いオアシスのメンバーは勝利の美酒に酔っていた

克己「ティアナ、何処だ！」

克己は廃墟となった街でティアナを探していた

克己「ティアナ！……ティアナ、」

克己は瓦礫の上に座っているティアナを見つける

克己「ティアナこんな所にいたのか……！！そいつは……」

克己の目の前にはオアシスの亡骸を抱きかかえ泣き崩れているティアナがいた

第11話 過去？（後書き）

次で過去編は終わる……かも。

第12話 過去？（前書き）

今回は短めです。

第12話 過去？

ティアナ「……………」

ティアナ達は管理局員達を倒した後、街の外れの墓に来ていた

そこでは、魔道師達に殺された住民や赤いオアシスのメンバーを弔っている最中だった

克己「ハッサム、これで俺達の仕事は終わりだ報酬の方を」

ハッサム「……………分かりました……………ですが今は葬儀の最中、報酬の受け渡しは葬儀が終わってからで」

克己「ああ、それで構わん」

ティアナ「……………」

ティアナはオアシスの墓で泣きじゃくるハンナを見ていた

克己「ティアナ……」

ティアナ「克己、」

克己「少し良いか？」

ティアナ「ええ、良いわよ」

2人は墓場から離れ、街の外にやって来た

克己「ティアナ、今日見たとおりあれが管理局の本当の姿だ、管理
と言う名の支配それが奴等のやり方だ」

ティアナ「……兄さんもあんな事を……」

克己「…勘違いするなティアナ、あんな事をやるのはほとんどが本
局の魔道師だがティーダはそんな事をやる男じゃない、どんなに下
が丈夫でも上が腐っていればその組織は終わる」

ティアナ「……………」

克己「ティアナ、俺達の本当の目的を教えよう」

ティアナ「本当の目的？」

克己「俺達NEVERの本当の目的は管理局を潰す事だ」

ティアナ「！！………本気で言っているの？」

克己「ああ、本気だ」

ティアナ「………分かった、じゃあその目的の為に私の力を使って」

克己「おかしな事を言つなティアナ、お前はNEVERの一員、端から管理局潰しにはお前も必ず関わるんだからな」

ティアナ「そうだったわね」

そうして2人は互いを微笑みあつた

現在

ティアナ「あれからも色々合ったわよね」

克己「そうだな……」

レイカ「二人共、アジトに着いたよ」

克己「そうか、行くぞティアナ」

ティアナ「了解、」

過去編 完結

第12話 過去？（後書き）

過去編はこれで終了、次回から本格的に原作に介入していきます。

第13話 機動六課（前書き）

少し、スピードダウンして来ました

第13話 機動六課

克己「機動六課？」

マリア「ええ、最近ミッド地上部隊に出来た部署よ」

そう言うとマリアはその資料を克己に渡す

克己「……………ティアナ」

克己は資料を一通り見るとティアナを呼ぶ

ティアナ「何？」

克己「ちょっと来てくれ」

ティアナ「どうしたの？」

克己「まずこれを見る」

克己はそう言つと資料をティアナに渡す

ティアナ「これって？」

克己「最近新しくミッド地上部隊に出来た機動六課って所だ」

ティアナ「……………あの、管理局はどこかと戦争でも始めるんですか？」

克己「いいや、そんな情報は無いが、あくまで試験部隊らしい」

ティアナ「いや、これ戦力過多すぎでしょSランクとニアSランク
それとAAAランクとAAランクが合わせて7人ってどんな部隊よ」

京水「あら、しかも隊長格の奴等はリミッターまで付けて所属して
るのね」

ティアナ「うわっ！！京水、何時から其処に」

京水「あら、私は神出鬼没よ」

ティアナ「まったく…でも、この部隊がどうしたっての？」

マリア「この部隊が私達NEVERの敵に成るかどうかが確かめよう
と思ってね」

ティアナ「考え過ぎじゃないですかプロフェッサー」

克己「嫌、調べて損は無いだろう御袋、その機動六課が動いたらす
ぐに知らせる」

マリア「分かったは、克己」

マリアはそのまま研究室に向かう

数日後

マリア「克己、六課の動きをつかんだわ」

克己「そうか、何処だ？」

ティアナ（プロフェッサーの報告によればロストログアレリックを積んでいるミッドチルダの山岳リニアールを狙って最近噂のガジエットが車内に侵入してそれを叩く為に動くらしい）

克己「ティアナ、京水」

京水「はい」

ティアナ「何？」（うわー嫌な予感）

克己「すぐにミッドチルダに向かうぞ…機動六課、その目で確かめてやるぞ」

ティアナ（はあ、結局こうなるのね…）

その数分後、克己達はミッドチルダに向かった

第14話 リニアレール(前書き)

今回は克己達の駄目だしが多いです

第14話 リニアール

ミッドチルダ山岳地帯

ティアナ「ねえ、あのリニアールの先端にいるのって」

克己「ガジェットとか言う奴か」

ティアナ達は離れた所でリニアールの先端から内部に潜入しているガジェットを目にする

京水「まあ、丸っこくてバ〇ブみたい」

ティアナ「……………京水、ぶっ飛ばされたいの？」

京水「まあ、怖い」

3人がそんなやりとりをしていると

克己「っ！……来たか」

克己は上空を見つめる

ティアナ「えっ、何が？」

ティアナが上空を見ると

京水「どうやら向こうさんが来たようね」

空にはへりが一機リニアールに向かっていた

ティアナ「あれが噂の機動六課ね」

するとへりの後部ハッチが開く

京水「あらっ、一体どんな娘が来るのかしら？」

京水がそう言うとハッチ付近にバリアジャケットをつけていない茶髪でポニーテールの女性が出てくる

するとその女性は

ティアナ「あれっ？……何やるうとしてんの、あの人？……何を？
……ええええ！！」

すると女性はへりから飛び降り空中でデバイスを起動させた

その一部始終を見ていた克己達は

ティアナ「克己さん……」

克己「何だ？」

ティアナ「あの方は、自殺志願者ですか？」

克己「違うと思うぞ」

ティアナ「いや、デバイスを空中で起動させるって…もしへりの外に敵がいたらあっとゆう間に八子の巣ですよ！？」

京水「きつと頭のお味噌が足りないのよ」

克己「……………」

克己は無言で望遠鏡を取り出し女性の方を見る

克己「……………あれは確か、機動六課スターズ分隊長の高町なのか……」

ティアナ「高町！？それってあの、管理局の白い……」

京水「アックマン？」

ティアナ「悪魔です……………」

すると上空にガジェットが数十機現れるが

高町はガジェットを砲撃魔法で破壊していった

ティアナ「さすが白い悪魔、名前は伊達じゃないって事ね」

京水「あらっ？また一人来たみたいよ」

するとそこに黒いバリアジャケットを着たツインテールの魔道師が現れる

克己「あいつは確か、フェイト・T・ハラウオン…機動六課ライティング分隊長だ」

ティアナ「今度は金色の死神か……」

克己達はそのまま2人がガジェットを倒している光景を凝視していた

ティアナ「ほんと、デタラメな奴等ね」

京水「そう言えば……リニアレールに向かったへりはどうしたのかしら？」

ティアナ「あつ、そこは私が行くわ」

克己「ティアナ」

ティアナ「何?……」

克己「奴等と接触はするなよ」

ティアナ「はいはい、分かってますよ」

ティアナはそう言うとバイクにまたがりリニアレールの方に向かう

山岳リニアレール付近

ティアナ「へえ、中々やるじゃないあの娘」

ティアナはリニアレールの上でガジェットをボウガン型デバイスで倒している銀髪の髪をした少女を見ながらそうつぶやく

ティアナ「最初の白い悪魔みたいに飛び降りた時はビックリしたけど、腕はまだ少し甘いけどこれから化けるかもね……それにしてもさっきのバンドナは、一人で突っ込むなんてまだまだ駄目ね……そう言えばあのちびっ子2人はどうしてるかな」

ティアナはちびっ子と言った局員の所に行く

ティアナ「っ?……ちょっとあれはやばそうね」

ティアナの視線の先には巨大なガジェットに拘束されている少年とそれを呆然と眺めている少女がいた

そしてガジェットはそのまま少年を放り投げる

ティアナ「！！、たくっ！世話の焼ける！」

ティアナは少年を助けよに行こうとしたが

克己「奴等と接触はするなよ」

ティアナ「……………」

克己との言葉を思い出し止まってしまっ

ティアナ（しかたない……………あの子も管理局員、助ける義理なんて）

ティアナがそう考えていると

もう一人の少女が少年を助けようとリニアールから飛び降りた

ティアナ「……もう！、どうにでもなれ！……クロス
ファントム！！」

ティアナはそう叫ぶとクロスファントムを起動させる

ティアナ「待ってなさい！！」

ティアナは木にアンカーを打ち込み2人を助けようと飛び降りる

ティアナ「そのピンク色のガキ！！」

???「えっ？」

ティアナ「動かないでよ！」

ティアナはそのまま少女を腕で抱き寄せる

ティアナ「次！！」

ティアナは少女を抱いている手のクロスファントムで少年をアンカーで巻きつける

ティアナ「これで!!」

ティアナはそのままアンカーを戻しリニアレールに着地する

ティアナ「……………さてと、ガジェットの力どれほどか見せてもらいましょうか」

ティアナはクロスファントムの銃口をガジェットに向けた

第14話 リニアレール（後書き）

銀色の髪の少女は次の話かその次の話で分かります。

第15話 接触

はやて「なっ、なんや？あの娘は」

機動六課ブリーフィングルーム内では部隊長の八神はやてが突然の
乱入者に驚愕していた

グリフィス・シャーリー「……………」

はやて「はっ！！シャーリー！、はやくなのはちゃんとフェイトち
やんに現場にむかわせるんや！！」

シャーリー「はい……」

リニアレール

ティアナ「さあ、いっちょやりますか」

ティアナはゆっくりとクロスファントムの銃口をガジェットに向ける

キヤロ「あの…貴方は？」

ティアナ「んっ？…通りすがりの魔道師よ」

ティアナがキヤロの方を振り向くとその隙にガジェットはティアナに攻撃を仕掛ける

ティアナ「おっと、お返しよ」

ティアナはガジェットの攻撃をかわすとガジェットに向けて発砲する

ティアナ「あら？」

だが、魔力弾はガジェットが出したピンク色の障壁に阻まれた

ティアナ「AMFか、やっかいね…だけど」

カチャ

ティアナ「これだったらどうかしら…！」

ティアナはそう言うと背中からマシンガンを取り出した

キヤロ「!!まさかそれ!」

ティアナ「当たり前……質量兵器よ!」

ティアナはガジェットに向けてマシンガンを乱射する

ガジェットはAMFを展開したが質量兵器であるマシンガンにそんな物が効くはずもなくガジェットはそのまま蜂の巣になり爆発した

ティアナ「お仕事終了……さて、逃げるとしますか」

ティアナがアンカーを打とうとした時

????「止まって下さい!」

ティアナ「んっ?」

ティアナが声のする方向に振り返ると

なのは「管理局機動六課スターズ分隊長、高町なのはです、貴方を質量兵器不法所持で逮捕します」

ティアナ（げっ、管理局の白い悪魔か……ちょっと待って、白い悪魔が来たという事は？）

ティアナが後ろを振り向くと

フェイト「動かないで！」

ティアナ（やっぱり……金色の死神まで、どうしよ……あっ、そう言えば）

なのは「すこし、お話ししようか」

なのはがティアナにバインドを掛けようとした時

ティアナ「悪いけど、今日は無理だわ！」

ティアナはポケットからボールの様な物を取り出し下におもいきり叩き付けた

するとボールが割れ辺りに煙が立ち込める

なのは「なっ！何！？」

ティアナ（今だ！）

ティアナはアンカーを上に向かい撃ちその場から逃げた

その後、なのは達は辺りを搜索したがティアナは何処にも見当たらなかった

輸送機内

克己「ティアナ、お前は自分がした事を分かっているのか？」

ティアナ「……………」

克己「幾ら何でも軽率すぎる、次からはちゃんと気を付けろいいな」

ティアナ「はい……」

克己はそう言うとコクピットに向かう

京水「ティアナ」

ティアナ「京水…何？あなたも私に注意？」

京水「いいえ、あなたに言う事があるの」

ティアナ「言う事？何よ」

京水「克己ちゃん、あんな風に厳しく言ってるけど、本当はあなたの事、すごく心配してたのよ」

ティアナ「……………そっ」

ティアナはそう一言だけ言つとそのままマジトに着くまで一言も喋らなかつた

第15話 接触（後書き）

次の話でそろそろT2ガイアメモリを出したいと思いますが、最初に出るのはエターナルだけなのでティアナのガイアメモリアンケータは今週の金曜日までとします

ご感想の方もよろしくお願いします。

第16話 管理局

ティアナが六課の局員と接触した5時間後、機動六課では

はやて「しかし…一体なんなんやこの娘は？」

そこには六課の隊長、副隊長達とフォワード陣が会議室でティアナがガジェットを倒した映像を見ていた

フェイト「エリオやキャロを助けてくれたから…そんなに悪い娘って分けじゃないと思うけど」

なのは「うん…質量兵器を所持してるから、今度会ったら…捕まえるしかないね」

キャロ「そんな…あの人は私とエリオ君を助けてくれたんですよ…！」

エリオ「そうですよ！何で…！」

フェイト「キャロ、エリオ…だけど質量兵器の所持は犯罪だよ」

キャロ・エリオ「……………」

フェイト「2人だって局員なんだから、それぐらい分かるよね」

キャロ「……………はい」

エリオ「……………分かりました」

なのは「大丈夫だよ、あの娘は質量兵器を持っていたけどエリオとキャロを助けてくれたんだから、罪は軽くなる」

はやて「まあ、この娘の事は後回しや今日はもうこれでお開きでええな」

なのは「うん、皆今日はもう早く寝て明日の訓練に備えてね」

「……………はい……………」

フォワード陣はそのまま会議室から出て行った

スバル「ねえ、ティス」

ティス「何？スバル」

スバル「今日の娘さあ、私達と同じくらいの女の子だよね」

ティス「そうね、」

スバル「そんな娘が何で……」

ティス「そこまで」

スバル「んん」

ティス「そこまで深く考えないでおきましょう」

スバル「うっ、うん……」

ティス（けど気に成るわあの娘、調べた方がよさ様ね）

ティースとスバルはそのまま自分達の部屋に戻っていった

第16話 管理局（後書き）

ティス・ライト

今作品のティアナポジションのキャラ、原作のティアナと性格は同じ、違うのはなのは達に劣等感がない事と六課の面々に内心呆れている事

長髪の銀色のロングヘアが特徴

デバイス

ロビン・フッド

ボウガン型のデバイス

基本は一本ずつだが、状況に合わせて乱射が可能

カラーリングは基本は白と緑

第17話 ホテル・アグスタ？（前書き）

今回はホテルアグスタの話が始まる少し前の話です。

第17話 ホテル・アグスタ?

ティアナが機動六課と接触した数日後

ティアナ「ホテルアグスタのオークションに潜入する?」

克己「ああ、それがどうした?」

ティアナ「いや、オークションって骨董品とかでしょ…今度の依頼はオークションの壺とかでも盗むの?」

克己「バカ言うな、今回は依頼じゃないオークションの裏で取引されるある物を盗む」

レイカ「ある物?」

マリア「それがこれよ」

マリアはそう言つと一つのモニターを写す

剛三「何だありゃ?」

賢「メモリ？」

モニターにはUSBメモリの形をしたメモリが写されていた

マリア「通称ガイアメモリ、とある管理世界から押収したロストロギア…そして」

マリアは次のモニターを写した

マリア「これが私達が狙うT2ガイアメモリ」

ティアナ「何か、形が似てるわね」

マリア「ええ、T2ガイアメモリは管理局がガイアメモリを解析して製造した兵器よ」

ティアナ「解析って、ロストロギアは管理・保管するんじゃないか？
たの…まっ、今更か」

克己「俺達の今回の目的はホテルアグスタのオークションに潜入後、

T2メモリの受け取りに介入しT2メモリを奪いその場から逃げる、
以上だ…何か質問があるか？」

ティアナ「特に何も」

レイカ「同じく」

剛三「あるわけねえだろ」

賢「同意…」

京水「はい！はい！質問、しつもん！」

克己「何だ？京水」

京水「オークションにはどんなお洋服で行ったら良いかしら？」

克己「……………はあ、」

京水の言葉に克己達は呆れる

ティアナ「そんなの適当で良いでしょ」

レイカ「ティアナの言う通りよ、別に私達オークションが目的じゃないんだから」

京水「けどー、かなりのセレブが来るんでしょ、だったらそれぞれのおうの服で行かないと怪しまれるわよ」

克己「……………確かにそうだな、御袋」

マリア「何？克己」

克己「大至急タキシードとドレスを人数分集めてくれ」

マリア「分かったわ」

マリアはそのまま部屋から出て行く

ティアナ「そっぴゃ克己」

克己「何だ？」

ティアナ「オークションにどうやって潜入するの、チケットがないと入れないんだし隠れて入ろうとしても警備は固いはずだし」

克己「それなら大丈夫だ、京水」

京水「はい！」

ティアナ「ん？」

すると京水は懐から六つの紙を取り出す

京水「チケットなら、全員分あるわ」

ティアナ「何時の間に…」

克己「何を驚いている、俺達は裏の世界ではかなりの力を持っているこれぐらい朝飯前だ」

ティアナ「はあ、改めて自分の組織の大きさを自覚するわ」

克己「作戦結構は明日だ、すぐに準備しておけ」

ティアナ「了解、」

レイカ「ティアナ、ちょっと飲みにも行かない？」

ティアナ「あつ、それ良いわね…剛三、賢、京水、それに克己も一緒におお？」

剛三「おっ！良いな、俺は良いぜ」

賢「OK」

京水「少し早いけど良いわよ、何だか今日は酔いたい気分なの」

ティアナ「克己は？」

克己「俺は遠慮しておこう」

ティアナ「何よ、連れないわね」

克己「それよりも、飲みすぎて二日酔いになんて成るなよ、明日の作戦に生じる」

ティアナ「分かってるわよそれぐらい、それじゃあ行くところか」

ティアナ達はそのまま部屋から出る

克己「ふう、……………」

克己は辺りを見回しテーブルの中から一つの瓶を取り出す

克己「あいつ等がいると飲まれる可能性があるからな」

克己の手には年代物のワインが握られていた

克己「まっ、この作戦が成功したら祝杯でも挙げるか」

そついいながら克己はワインのコルクを抜いた

第17話 ホテル・アゲスタ？（後書き）

テイアナのメモリが決まりました、作品の中で分かりますので楽しみに待って下さい。

第18話 ホテル・アグスタ？（前書き）

今回はホテル・アグスタの話です。

第18話 ホテル・アグスタ？

ホテル・アグスタ内

受付「いらっしやいませ」

受付の目の前にはとどころ髪が白髪になっている老紳士と金髪のロングヘアの眼鏡をした女性、シルクハットを被った男とその隣にいる無表情の男性、紫色の髪をしたポニーテールの女性と茶色い髪に青いメッシュをいれた青年がいた

???「招待されたジェイソン・フレディだが」

受付「お待ちしております、どうぞ」

そう言うと男達はオークション会場に向かう

ティアナ「ねえ、克己」

克己「何だ？ティアナ」

変装したティアナが小声で克己に質問をする

ティアナ「これからの流れは？」

克己「まあ、まずはオークション会場で普通の客としている、T2
ガイアメモリの引渡し前の30分前に会場を出て地下駐車場に向かい
T2ガイアメモリを奪ってそのまま逃走する、まあそれぞれ役割が
あるがそれは後で話そう」

ティアナ「分かった」

京水「けど、オークションまで後3時間30分はあるわよ」

剛三「そんなに待つのかよ!?!」

レイカ「剛三、少し静かにしなさいよ」

剛三「うっ、悪い」

賢「ん？」

京水「どうしたの？賢」

賢「あれを見る」

賢はそう言つと会場のとある一角を指差す

ティアナ「……あれって」

克己「機動六課部隊長八神はやて、そしてスターズ隊長高町なのは……どうやら今回は機動六課も警備任務に当たっている様だな……ティアナ」

ティアナ「何？」

克己「あの2人の今の汚点を言ってみる」

ティアナ「いやよめんどくさい」

克己「正解したら今度おごらしてやる」

ティアナ「うーん……まっ、暇つぶしになるからいいか、まず初めにあの格好どう考えても警備する格好じゃない、次に隊長だったら最前で警備をしないといけない、最後にこれ一番致命的ね、あの2人の魔法は室内で簡単に使える魔法じゃない、もし何かしらの事故があつた場合あの2人は外に出ないかぎりほぼ足手まといになるわね…どう、私の答えは？」

克己「中々いい線を行ってる、この作戦が終わったらおごってやるよ」

ティアナ「やりい」

京水「あーあ、いいなティアナだけ」

克己「いや、今は機嫌がいい作戦が成功したら全員分俺が持つ」

京水「わーお！」

レイカ「へえ、珍しいじゃん克己」

剛三「ごちになります」

賢「ふっ……」

ティアナ「ふう…ごめん、ちょっと外の空気吸ってくる」

克己「そうか、早く戻れよ」

ティアナ「はいはい」

ティアナはそのままホテルの外に向かう

ホテル外

ティアナ（この作戦、何も無ければいいんだけど）

???「あの、すみません」

ティアナ「んっ？」

???「貴方、どこかでお会いしませんでしたか？」

ティアナ「そう言う貴方は？（この娘、リニアレールで見たあの）」

???「申し送れました…私」

ティス「管理局機動六課、スターズ分隊所属スターズ4ティス・ライトと申します」

第18話 ホテル・アゲスタ？（後書き）

この2人はかなりかかわりあうと思います。

次回の更新を楽しみにしておいてください。

それとアンケートを取ります

今回のアンケートはライバル決めです

NEVERと機動六課メンバーで戦う時にこいつはこいつと的組
み合わせを考えて下さい。

たとえば

克己となのは

京水とフェイト

見たいな感じです。

ティアナはティスとスバルの2人と決め手いますので

それ以外のメンバーでお願いします。

第19話 ホテル・アグスタ？（前書き）

お知らせがあります、アンケートの件ですができれば理由を詳しく書いて出してくれたほうが選びやすいです。

第19話 ホテル・アグスタ?

ホテル・アグスタ内

レイカ「ティアナ、遅いわね」

京水「お花でもつみに行ったのかしら？」

剛三「花?…何で花なんかをつみに行くんだよ」

京水「あのねえ、この場合の花はトイレの事よ!…そんな事も分からないの!」

剛三「ああ、もう!いちいち怒鳴るなよ!」

レイカ「2人とも静かにしなよ…怪しまれるよ」

克己「だが…確かに遅いな」

レイカ「何かのトラブルに巻き込まれてなきやいいんだけど」

レイカは帰りが遅いティアナを心配していたがその頃ティアナは、ホテルの外で機動六課のティスと鉢合わせしていた

ティス「あの、やはりどこかでお会いしませんでしたか？」

ティアナ（やばい！ばれた？） 「いえ……貴方と会うのはこれが初めてですが…何か？」

ティス「そう…ですか……分かりました、手間を掛けて申し訳ありません」

ティアナ「いえ、気にしてませんから…お仕事がんばって下さい」

ティス「ありがとうございます、では」

ティスそのままホテルの東側に歩いて行った

ティアナ「ふう、危なかった」

克己「ティアナ」

ティアナ「あっ、克己、どうしたの？」

克己「お前があまりにも遅いからな探してたんだ」

ティアナ「そお、ありがとう」

克己とティアナはそのままオークション会場に足を進める

克己「それと、ティアナ」

ティアナ「何？」

克己「今新しい情報が御袋から届いた、このホテルにガジェットが向かってるらしい」

ティアナ「?!?!」

克己「まあ、俺達にとっては好都合だその隙にメモリを盗めるからな」

ティアナ「…克己、受け渡しの時間まで後どれくらい？」

克己「後…10分だ、レイカ達を向かわせてる」

ティアナ「それじゃあ、私達も」

克己「ああ、行くとするか」

ティス side

ティス「あの女の人…やっぱりどっかでみた事あるような」

スバル（ティス！）

するとスバルから通信が入る

ティス（どうしたの？スバル）

スバル（大変だよ、ガジェットが）

ティス（！！…分かった、私もすぐ向かう）

ティスはロビン・フッドを機動させスバルと合流しに行く

第20話 ホテル・アゲスタ？（前書き）

今回ようやくエターナルが登場です。

第20話 ホテル・アグスタ?

ホテル・アグスタ地下駐車場

そこに黒い服を着た男が3人走っていた

???「くそっ!まさかこんな時にガジェットが出てくるなんて」

???「どっする?」

???「はやく受取人に渡して騒ぎが収まってから逃げるしかない
だろ!」

???「そりゃあそつだ」

バアンツ!!

「!!!」

突然男の顔すれすれに弾丸が通り抜ける

「????」「なっ！なんだ!？」

京水「はあ、い、そこまで」

レイカ「その荷物渡してもらおうか」

「????」「そのエンブレム、お前達NEVERの人間か」

レイカ「あれ、知ってたんだ」

剛三「じゃあ話が早え、さっさとその荷物を渡しやがれ!!」

「????」「くそが!」

男達は腕に付けていたデバイスを起動させる

剛三「魔道師か…」

賢「全員、ミッド式杖型デバイス、だがそれぞれカスタマイズされている…」

レイカ「たぶん、後ろにいる奴から遠距離、中距離、近距離戦に力スタマイズされてるデバイスね」

魔道師「ふん！、よく見たら魔力知はゼロ楽勝だな」

京水「あら〜ん、そんな事言つてると足元掬われるわよ」

魔道師「はっ、偉そうに」

京水「そ・れ・と・」

魔道師「何だ？」

京水「後ろ」

魔道師「」「後ろ？」「」

男達が後ろを振り向いた瞬間

克己「はああ！」

ティアナ「てりゃあ！」

魔道師「ぐはっ！！」

克己とティアナが男達に不意打ちをくらわした

レイカ「遅いわよ二人共」

ティアナ「ごめんごめん、だけど良いもの手に入れたわよ」

剛三「良いもの?」

克己「これだ」

すると克己は持っていたトランクを開けある物を見せた

魔道師「貴様!!!それは!?!ロストドライバー!」

魔道師3「馬鹿な！！それは、取引の人間が持っていたはず！？」

ティアナ「悪いけど、そいつらは今お眠ねよ」

ティアナはトランクを見せびらかす

魔道師2「なっ！？何時の間に！」

男は手に持っていたはずのトランクがティアナの手にある事に驚愕する

ティアナ「T2ガイアメモリは頂いていくわよ」

魔道師1「させるか！！」

男は克己とティアナに向けて魔力弾を撃った

克己「ふっ、」

ティアナ「あらよつと」

2人は男の攻撃をかわし一つの柱に隠れる

ティアナ「克己、メモリを」

ティアナはそう言うとトランクを開けたその中にはAからZまでの
26個のメモリが入っていた

克己「……ああ」

克己はそのままトランクの中から一つのメモリを取り出した

魔道師3「貴様！何をするつもりだ！？」

克己「見て分からないのか？」

魔道師1「やめろ！！」

克己はそのままメモリを動かした

ETERNAL

克己「変…身…」

ETERNAL

すると克己の回りを赤い雷が包み込むとそこには

の形をした様な目と白いボディ、腕に赤い炎をペイントした者が
立っていた

克己「……………」

だがその体を青い炎が包み込み腕の赤い炎は青くなり体にはベルト
が巻きつき背中にはマントが現れた

魔道師1「馬鹿な！？レッドフレアではなくブルーフレアに成った
だと!？」

克己「なるほど、素晴らしいなこの姿」

ティアナ「克己、その姿は？」

克己「ああ、俺の新しい力だ…それと、今の俺の名はエターナル」

克己「仮面ライダーエターナル」

第20話 ホテル・アゲスタ？（後書き）

感想とアンケートの両方よろしくお願いします。

第21話 ホテル・アゲスタ？

魔道師3「エターナルだと……くそっ！傭兵の分際で！！」

逆上した魔道師の一人が克己に向けて魔力弾を撃つ

克己「ふっ……」

克己は魔力弾をエターナルローブで防ぐ

克己「そんな物か？魔道師の実力は」

魔道師3「なっ！？」

克己「今度は……こちらの番だ」

克己はそう言うとエターナルエッジを弾を撃った魔道師に向けて投げつけた

魔道師3「ぐえっ！」

エターナルエッジは魔道師の脳天に突き刺さる

克己「ティアナ！」

ティアナ「ええ！」

ティアナは左の魔道師に向けて魔力弾を放つ

魔道師2「くそっ！」

京水「はあ〜い！」

魔道師2「ぐはっ！」

魔道師はティアナの攻撃を避けたが京水の鞭によって捕まってしまう
った

京水「私達がいる事を忘れるなんて…お仕置きよ…！…レイカ！」

レイカ「はあ…！」

京水がそう言うとレイカが捕まっている魔道師にとび蹴りをくわえた

魔道師2「ぐはっ！」

レイカ「賢!!」

賢「了解……」

賢はマシンガンを魔道師に向けて乱射した

魔道師2「ぎゃあああ!!」

魔道師はマシンガンを受けその場に倒れる

魔道師1「そっ…そんな馬鹿な……」

魔道師の男は今の状況を受け入れずにいた

剛三「おらー!!」

魔道師1「!!！」

その瞬間に剛三が男を捕らえる

剛三「克己!!！」

克己「よくやった、剛三」

克己は最初に殺した魔道師からエターナルエッジを抜き取り男に向
かって行く

魔道師1「くっ…くるな!!！」

克己「……………」

克己は無言で男にエッジを向ける

魔道師1「ぎゃああああ!!！」

エッジは男の心臓を抉り取った

魔道師1「……………」

男はそのまま息絶えた

克己「さてと……長いは無用だ、T2メモリを持ってそのまま逃げるぞ」

ティアナ「了解」

克己達は地下の水路を使いホテル・アグスタから抜け出した

第22話 T2ガイアメモリ（前書き）

まあ、今回はホテル・アグスタの事件の翌日の話です。

第22話 T2ガイアメモリ

NEVERアジト内

克己「それでお前ら、自分のメモリは決まったか？」

京水「もちろんよ、克己ちゃん…私のメモリはこの、ルゥナゥメゥモゥリッ！」

京水はそう言うのとLのイニシャルが着いたルナメモリを体をくねらせながら克己に見せ付け

レイカ「私のはこれ」

レイカはHのメモリ、ヒートメモリを

剛三「俺はこれだあ！」

剛三はMのメモリ、メタルメモリを

賢「……トリガー……」

賢はTのメモリ、トリガーメモリを

それぞれメモリを前方に放ると京水は額、レイカは胸元、剛三は背中、賢は右手のひらにそれぞれメモリが4人の体に吸い込まれていき

それぞれ黄、赤、銀、青の光に包まれると

京水がいたところには全身が眩く光る金色に変化し、顔は目や口などのパーツらしき物は無く黒い筒のような形をしており、両手は幅と厚みを持った太い鞭のような形に変化し両肩と胸元辺りから黒い爪のようなモノが伸びている

幻想の記憶を宿したT2ルナメモリにより変化したルナドーパントに

レイカは全身を赤く染め上げた異形、顔の下半分は人間の様な白い肌と深紅の唇が対象的なドーパント

熱き記憶を宿したヒートメモリによって生み出されたヒートドーパントとなる

剛三は左半分は銀色に輝く鉄とは対照的に右の顔は錆びて右のみにある赤い眼が特徴的な

闘士の記憶を宿すメタルメモリにより変化したメタルドーパントになり

賢は全身を青い装甲で包み、顔の中心は照準機を思わす十字サイトが書かれた単眼を持ち、右手にはライフルのような長い銃身を持った銃器を装備し

狙撃者の姿を宿すトリガーメモリによりトリガードーパントとなる

ティアナ「うわー……結構迫力あるわね、その姿」

京水「あら、ありがとう」

ティアナ「いや、褒めてはないんだけど……」

レイカ「それよりもティアナ、あんたは自分のメモリどうしたの?」

ティアナ「ああ……ごめん、まだ決まっていなくて」

剛三「おいおい、早く決めちまえよ!自分のメモリぐらい」

剛三はティアナに近づくが

ティアナ「ちょっと、さすがにその姿でこられるとさすがにいやな
んだけど」

剛三「何だよっ！たくっ……」

克己「まあいいさ……時間はあるんだ、」

克己はそう言うとティアナの肩を叩く

克己「自分にあつたメモリを探すといい」

ティアナ「あっ……うん、分かった」

ティアナは顔を赤くしメモリを保管してある部屋に行く

マリア「克己……」

克己「何だ、御袋？」

マリア「管理局の違法研究所を一つ突き止めたわ」

克己「そうか…だったら二日後にその研究所を強襲する、その間にそれぞれメモリの力を使いこなせるようにしておけ」

京水「はあ〜い」

レイカ「分かった」

剛三「おっしゃー！じゃあ、特訓だ！賢、付き合え！」

賢「オーケー……」

4人はそう言つと会議室から出て行く

メモリ保管庫

ティアナ「う〜ん……自分にあつたメモリって言われてもなあ」

ティアナは保管されてあるメモリを見ながらそう呟く

ティアナ「ロケットは…ダメ、ユニコーンも…ダメ、ジョーカーは…全然ダメ…どうもしつくり来るメモリがないなあ、どうしよ…
…んっ？、このメモリは…」

ティアナはおもむろに一つのメモリを手を持つ

ティアナ「……………良い…これよ……………見つけたは、私のメモリ！」

ティアナはそう言つとそのメモリを前方に放り、自分の体に入れる

そして保管庫から光が流れそこにはドーパントとなったティアナがいた

ティアナ「やっぱり…しつくりくるは、このメモリは」

ティアナは笑みを浮かべ窓の月を見上げる

第22話 T2ガイアメモリ（後書き）

次回でティアナは何のドーパントになったか分かります

第23話と言っなのアンケート

どうも、お久しぶりです

今回は皆さんにアンケートに答えていただきこうと思い更新しました

さて、まず最初はジエイルとナンバーズについてですがジエイルやナンバーズは仲間か敵かどっちが良いでしょうか？ 良いと思った人は1 ダメと思った人は2と書いて下さい。

第2問 PSPソフトで出たマテリアル三人娘は出して欲しいですか？

欲しい人は1 出さなくて良いと言う人は2

第3問 もし、仮面ライダージョーカーを克己達の敵として出す場合は機動六課のメンバーが良いですか？それともオリキャラを出しますか？

機動六課の人は1 オリキャラの人は2 てゆうか、ジョーカーは
出さなくて良いと言う人は3と書いて下さい。

まあ、問題は以上です。

アンケートの仕方の例は

例

一 問 目 [1]

二 問 目 [2]

三 問 目 [3]

以上です。

注意事項としてこれはあくまでアンケートです。票数が多いからと
いってそれが本編で絶対なるとゆう事はありません

最後に克己達のデバイスを作ってみようと考えています

良いアイデアがあったらどしどし書いて下さい。

気に入った物は本編に出るかもしれません。

それではこれでアンケートを終わります。

第23話と言つなのアンケート（後書き）

次回はティアナのメモリとドーパントが判明します。

第24話 メモリとマテリアル（前書き）

今回はティアナのドーパントと新キャラが出ます。

新キャラは皆さんが思ってる通りの三人です。

第24話 メモリとマテリアル

管理世界 とある研究所

「???」はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

「???」もつやだよ……こんなやだ」

「???」くそつ！王である我が」

実験場には栗色の髪をした短髪の少女と水色の髪をしたツインテールの少女、そして白と黒の色をした髪の少女が倒れていた

研究員1「N-13、F-13、この二つも失敗か」

研究員2「はい、H-13もいいところまでは行っているのですが……」

主任「もついい、そこそこのデータは取れた明日にでも処分してください」

研究員3「分かりました」

研究員達が実験室から出ようとした時

ドガアアン!!

「「「!!!!!!」」」

辺りから爆発音が轟いた

主任「何だ!? 一体何が起こった!?!」

研究員2「侵入者です!」

主任「何だと!? 何故この場所が!?!」

研究員3「どっ、どうしましょう主任?」

主任「早く研究資料を持って逃げるんだ!」

研究員 1「マテリアルシリーズ達は？」

主任「そんな物、全部廃棄だ！こんな事が世間にはれでもしたら…」

バアアアン

突然、実験室のドアが吹き飛び中からエターナルに変身した克己とドーパントとなった、京水、レイカ、剛三、賢とまだドーパントになっていないティアナが現れた

克己「中々、おもしろい話をしているな」

主任「なっ、何だ！貴様等は！？」

克己「聞かせてもらおうか、その話を」

研究員 2「貴様等何を言って！」

剛三「おらああー！！」

研究員2「ぐはっ！」

すると剛三は持っていた棒で研究員の一人を吹き飛ばした

レイカ「はああ！」

研究者3「げばっ！」

レイカは左足に炎をともし研究員の顔にとび蹴りを放つ

賢「……………」

バアン！

研究員1「！！！」

賢はライフルで研究員の頭を打ち抜く

主任「ひっっ！」

そして実験室には克己達と研究所の主任だけになった

克己「俺達も暇じゃない、さあ聞かせてもらおうか、あの実験場に
いるガキ共について」

主任「わっ、分かった」

すると研究者はゆっくりと克己達に喋り始めた

主任「お前たちは、闇の書の欠片事件を知っているか」

克己「ああ、聞いた事がある管理外世界の地球の海鳴市で起こった
闇の書事件の欠片が起こした事件だろ」

主任「ああ、あそこにいるモルモット達はそのマテリアルを参考に
して作られたクローンだ」

ティアナ「なるほど、確かその中には機動六課のあの三人を元に作
られたマテリアルがいたわよね」

主任「そうだ、だから我々は偶然入所した闇の書の欠片を使いクロ
ーンを作り管理局の戦力としようとしたのだ」

レイカ「そう言えば、あいつ等をN - 13とかF - 13とか呼んでたけど、それは」

主任「クローンの名前だ奴等はそれぞれ13体目のクローンだ」

克己「13体目？なるほど、残りの12体いや、それぞれ13だとすると36体のクローンは大方処分したと言う事か」

主任「……………」

克己「凶星つて所か…ティアナ」

ティアナ「了解」

ティアナは懐から一つのメモリを取り出す

主任「まっ、待ってくれ！ここまで話したんだ、だから命だけは！」

ティアナ「聞く耳、もたないわ」

ティアナは冷淡にそう言うとメモリを機動させた

FANG

ティアナはメモリを右腕に差し込むとティアナの体が恐竜の様な姿をしたドーパント

ファングドーパントと成る

主任「ひい!!」

ティアナ「じゃあね、」

そう言うとティアナは腕に付いている刃をひとつ引き抜くとそのまま研究者に投げつけた

主任「!!……」

刃はブーメランの様に回転し研究者の回りを一周しティアナの元に
戻ると研究者の首が床に落ち切られた後から大量の血が噴出した

京水「やるじゃない、ティアナ」

レイカ「その姿、結構活かすよ」

ティアナ「ありがと……克己、相談があるんだけど」

克己「何だ？」

ティアナ「あの子達、アジトに連れ帰っちゃダメ？」

克己「……ふん、好きにしろ」

ティアナ「ありがと、」

ティアナはそう言うとドーパント体を解除させて実験場に向かう

ティアナ「大丈夫？」

????「……はい、何とか」

栗色の髪の少女がそう呟く

ティアナ「この場所にいたら危ないわ、私達と一緒に行きましょう」

???「何を世迷言を我らはただのクローン…いまさら」

ティアナ「馬鹿言ってるんじゃないわよ」

ティアナはそう言うと白髪の少女を持ち上げる

???「なっ、何をする!？」

ティアナ「クローンだろうが、なんだろうが、あんた達は今、生きてるんでしょ?それとも何、あんた達は死にたいの?」

???「ぼっ、僕は……僕は生きたい!」

水色の髪の子が突如、大声を上げる

ティアナ「そう、それでいいの……今は私達に着いて来て」

「……分かった、」

ティアナ「それでよし」

ティアナは三人に笑みを浮かべながらそう言った

第24話 メモリとマテリアル（後書き）

フアング・ドーパント

姿は仮面ライダーオーズの恐竜グリードの肩のプテラノドンが鋭利な巨大な刃に成ったのと、胸のトリケラトプスがフアングメモリの恐竜みたいな形に成っている事と両腕と両足にそれぞれフアングジヨーカーが変身した時に伸びた刃のような物がそれぞれ一本ずつ付いている

第25話 名前

克己達が違法研究所を襲撃した翌日

ティアナ「私達と一緒に管理局を倒す手伝いをしたいって事？」

N - 13 「はい」

H - 13 「ああ、王たる我を侮辱した罪を払わせなければいけないかな」

F - 13 「僕は2人と一緒にいたいから」

ティアナ「そう………克己、どうかしらこの子達をいれたら戦力の増強になるんじゃない？」

ティアナが克己にそう提案すると

克己「………良いだろう、コピーとはいえ闇の書のマテリアル、訓練すればSSの魔道師と同等の力をもてるかもしれん………それで何と呼べばいいんだ？」

N・13「えっ?」

克己「何を驚いてい、るさすがにN・13と呼ぶわけにはいかない
だろ」

N・13「そうですね……私達には闇の書の欠片の記憶があります、
私は星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター、シュテルと及び
ください」

ティアナ「そう……よろしくね、シュテル」

シュテル「ええ、それと彼女は雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシ
ヤー、そして闇統べる王ロード・ディアーチエ」

シュテルは青いツインテールの少女をレヴィ、白い色の髪をした短
髪の少女をディアーチエと呼んだ

ティアナ「克己、シュテル達にもT2を渡すの?」

克己「ああ。そうだな考えておこう」

克己はそのまま部屋から出ようとした

シュテル「待って下さい」

シュテルが部屋から出ようとした克己を止める

克己「何だ？」

シュテル「私達を記号で呼ばず名前と呼んでくれてありがとうございます」

克己「……………」

克己はシュテルの言葉を聞くと無言で部屋を出た

レヴィ「あの人、怒ってるのかな？」

ティアナ「大丈夫よ克己はあれで結構照れ屋だから」

ティアナがレヴィにそう告げる

シュテル「ティアナ、私達を救っていただいた上、名前を呼んでくれてありがとうございます」

ティアナ「ちょっと、大げさよ名前くらいで」

シュテル「いえ、研究所にいた頃は記号で呼ばれていただけですから、うれしいんです名前と呼ばれるのが」

ティアナ「そお、」

レヴィ「僕もうれしいよレヴィなんてシュテルと王様以外に呼ばれた事なんてないから」

ディアーチェ「ふん、別にうれしくはないが、褒めてやる」

ティアナ「ありがと、ディアーチェ……それにシュテルとレヴィもこれからよろしくね」

ティアナは三人の名前を呼ぶと笑みを浮かべた

克己「来たぞ、御袋」

マリア「克己、例の物が出来たわ」

克己「そうか、じゃあそろそろあそこに行くとするか」

マリア「良いの克己？」

克己「ああ、それに今回は下見と墓参りが目的だからな」

マリア「そう……」

克己「久しぶりに行くとするか、俺の故郷」

「ミッドチルダに」

第25話 名前（後書き）

今回は原作の13話辺りです。

最後にこの作品の挿絵を書いてくれる人がいたらお願いします、恥ずかしながら私は絵を描く才能がまったくと言って良いほどありませんのでそれともしよかったら挿絵の入れ方を教えてくれたらうれしいです。

まあ、お題として克己達NEVERとティアナ、マテリアルズの絵を書いて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9173u/>

魔法少女リリカルなのはStrikers 永遠の傭兵部隊

2011年10月13日03時50分発行